

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 23 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381232

研究課題名(和文)宮坂哲文にみる戦後教科外活動の源流

研究課題名(英文)Origin of Post-war Extracurricular Activities in Tetsufumi Miyasaka's Work

研究代表者

根津 朋実 (NETSU, Tomomi)

筑波大学・人間系・准教授

研究者番号：50344958

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：教育学者・宮坂哲文の初期論考に注目し、戦後の教科外活動の源流を探った。父詰宗を含め、公刊物の収集と整理を主な研究方法とした。結果として、『禅における人間形成』に先立ち、戦中から戦後にかけて公刊された、数点の雑誌論文を発見した。戦後に単著として公刊された際、「集団」や「禅」を扱った部分が改変された事実も確認できた。後の「集団主義教育」との関連もあり、宮坂哲文研究および特別活動の史的研究の重要なキーワードとして、「集団」に注目する必要性が改めて示唆された。報告書として『宮坂詰宗、宮坂哲文関連文献目録付：木宮乾峰文献目録補遺』を作成し、関係研究機関等に配布した。

研究成果の概要(英文)：This study was to discuss the origin of postwar extra-curricular activities by focusing on the early stage of the works of the educationist Tetsufumi Miyasaka (1918-1965). The primary methodology was to collect and compile the publications of Tetsufumi Miyasaka and his father Teshu, which resulted in digging up several articles in magazines published during and after the war prior to "Human Development in Zen". I found that there were alterations in the parts describing collectives and Zen in those articles, which were published as a book after the war. This fact suggested anew the need for focusing on collectives as an important keyword in the historical study of Tetsufumi Miyasaka and extra-curricular activities in association with the later Collective Education. As a report, I prepared the "Bibliography of Teshu Miyasaka and Tetsufumi Miyasaka: with an appendix on the bibliography of Kempo Kimiya" and distributed it to the bodies and institutions concerned.

研究分野：教育学

キーワード：特別活動 宮坂哲文 宮坂詰宗 禅

1. 研究開始当初の背景

戦後日本における教科外活動の成立にあたり、『特別教育活動』(1950、明治図書)をはじめとする宮坂哲文(みやさか てつふみ、1918-1965)の諸研究は、重要な理論的視座を提供した。これまで彼に関する研究は、主に初著『禅における人間形成』(1947.3、霞ヶ関書房)を、検討の起点としてきた。

瞥見したところ、『禅における人間形成』は、戦中から戦後初期の論考を編集した著作である。先行研究は、これら戦中から戦後初期の他の論考をほぼ等閑視してきた。結果的に、宮坂哲文が教科外活動の理論的検討へと至った研究上の道筋は、未解明なままである。

戦中から戦後初期、宮坂はどのように教科外活動への関心を深めたのか。その過程で、初著に示された禅や仏教への関心は、どう変化したのか。これらの問いを扱うことで、今日の特別活動に代表される教科外活動の研究に対し、基礎的な視点を提供できるだろう。

国内の研究動向を概観すると、宮坂哲文の東京帝大卒業(1941.12)から初著までの論文等は、その数や内容を含め、未解明である。歿後に急遽編まれた『宮坂哲文教授追悼録』(岩浅他編 1965)の著述目録は、書名等に誤記があり、かつ戦中期の論考が網羅されていない。『宮坂哲文著作集』全3巻(初版 1968、再版 1975)は、戦中期の論考をまったく採録しなかった。

国外の研究動向はどうか。学術データベース ERIC(<http://www.eric.ed.gov/>)で"Miyasaka"をキーワードに検索したところ、宮坂哲文に関する文献はなかった(2012年9月14日)。学術情報検索サイトである Google Scholar (<http://scholar.google.co.jp/>)には、著作の引用情報や日本語の文献がいくらかあったが、本格的な英文論考はなかった(2012年9月14日)。

第2次大戦後の日本では、教科外活動の「カリキュラム化」(curricularization)が進展した。そして現在、特別活動は教育課程にとって重要な位置を占める。代表者は、カリキュラム研究の関連領域として教科外活動、とくに特別活動に関心を寄せ、複数の大学で「特別活動論」(専門科目)や、「特別活動研究」「特別活動の指導法」(教職科目)を担当してきた。平成22年度から3カ年、科学研究費補助金の助成を受け、特別活動のカリキュラム評価を研究する機会に恵まれた。この過程で、代表者は、特別活動の基礎研究の不足を改めて痛感した。これまで、教科外活動の「カリキュラム化」に尽力した1951年版学習指導要領一般編(試案)の改訂者、戦後初期の教育雑誌の存在等は、文字通り「忘却」されてきた。

如上の教育経験ならびに研究成果に基づき、「宮坂哲文を取り上げ、特別活動、ひいては教科外活動に関し、源流を歴史的に遡

て検討する」という、本研究課題を着想した。

代表者は、特別活動の「カリキュラム化」に関する知見を公表してきた。1947年版学習指導要領一般編(試案)の新教科「自由研究」や「図画工作」は、とくに小学校において社会科等の他教科との関連が深く、1951年版の改訂(教科以外の活動や特別教育活動の明記、教科課程から教育課程への変更)の素地を形成した、と目される。

奇しくも、宮坂哲文の初著『禅における人間形成』は、学習指導要領一般編(試案)と同じく1947年3月の刊行である。宮坂哲文の初期論考へと検討を進めることにより、従来の研究成果をさらに遡ることができる。あわせて、研究開始時点の史料収集から判明しつつあったのが、宮坂哲文の父、宮坂詰宗(みやさか てっしゅう 1887-1973)による理論的な影響である。

2. 研究の目的

この研究課題は、教育学者・宮坂哲文の初期論考に注目し、戦後の教科外活動の源流を探るものである。特別活動に代表される戦後の教科外活動は、実践の豊富さに比べ、理論的、歴史的な検討が今なお不足している。この状況を改善し、教科外活動研究の専門性を高め、学術的な視野を拡げることが、本研究課題の目的である。

3. 研究の方法

本研究課題は3カ年計画であり、個人研究で行われた。研究の課題と方法を次に示す。

(1)戦中期から戦後初期の宮坂哲文の論考を包括的に収集整理する。既存の史料を出発点とし、文献を渉猟する。

(2)哲文が自認した父からの影響を考慮するため、父詰宗(てっしゅう、1887-1973)の文献も収集する。なお「詰」(【吉吉】)はJIS第3水準、「哲」の異体字である。

(3)『禅における人間形成』に至る哲文の理論的変遷、アメリカ合衆国の extra-curricular activities の受容過程を解明し、教科外活動の源流を総合的に考察する。

4. 研究成果

(1)研究の主な成果

第1年次(平成25年度)

課題(1)「戦中期から戦後初期の宮坂哲文の論考を包括的に収集整理する。既存の史料を出発点とし、文献を渉猟する」を遂行した。具体的には、データベースや先行研究の記載を用い、関連文献のリストを作成し、文献の入手に努めた。主たる研究上の問い(Resear-

ch Question、RQ)は、RQ1「初著『禅における人間形成』以前に、宮坂哲文はどのような論考を著していたのか」、および RQ2「それらの論考は、『禅における人間形成』と、どういう関係にあるのか」だった。

RQ1 への答えとして、『禅における人間形成』の公刊に先立ち、戦中から戦後にかけて数点の雑誌論文が発表されていた事実を見出した。それらの多くは各種の研究助成を受け、いわゆる「統制雑誌」を中心に発表され、戦時色の濃い内容だった。

RQ2については、『禅における人間形成』の各章と、収集した公刊論文との異同を比較対照した。その過程で、戦後『禅における人間形成』から除かれた論考や叙述の存在が判明した。戦時体制下の「統制雑誌」で発表された文章が、戦後に単著にまとめられて公刊される際、とくに「集団」や「禅」を扱った部分が改変されていた。

第2年次(平成26年度)

課題(2)「哲文が自認した父からの影響を考慮するため、父詰宗の文献も収集する」を遂行した。前年度に引き続き、次の RQ (research question) を扱った: RQ3「詰宗はどのような人物だったのか」、RQ4「詰宗が遺した論文や著述は、どのようなものか」、RQ5「詰宗と哲文の間には、理論上の類似があるのか。とくに禅についてはどうか」。

検討の結果、詰宗は禅宗の高僧で学校教育にも関心を寄せていた(RQ3)。既公刊論文での記事類30数件に加え新たに雑誌記事等12件を確認した(RQ4)。禅とりわけ「行」に関し詰宗と哲文はやや異なる見解を有したと考えられる(RQ5)とそれぞれ判明した。

あわせて、次なる課題(3)「『禅における人間形成』に至る哲文の理論的変遷、アメリカ合衆国の extra-curricular activities の受容過程を解明し、教科外活動の源流を総合的に考察する」に着手した。

第2年次までの研究成果によれば、「哲文が戦中期まで扱ってきた禅による集団的な教育と、キリスト教文化圏の中等教育における extra-curricular activities とを対比させる意図が、戦後の論考として顕在化したのではないか」という仮説は、ほぼ支持されつつあるといえる。検討の過程で、後の「集団主義教育」との関連もあり、宮坂哲文研究および特別活動の史的研究の重要なキーワードとして、「集団」に注目する必要性が改めて示唆された。

第3年次(平成27年度)

引き続き、課題(3)「『禅における人間形成』に至る哲文の理論的変遷、アメリカ合衆国の extra-curricular activities の受容過程を解明し、教科外活動の源流を総合的に考察する」の遂行に努めた。研究の過程で、当初想定範囲を超え、哲文の理論的変遷における父詰宗の影響の大きさが判明したため、その

検討に注力した。結果、後段「アメリカ合衆国」以降の十分な検討には至らなかった。

研究成果として、『宮坂詰宗、宮坂哲文関連文献目録 付:木宮乾峰文献目録補遺』を作成し、関係研究機関等に配布した。これは、宮坂詰宗・哲文の父子に関連する資料目録からなる。「宮坂詰宗関連資料目録」は、以前の科研費による研究成果に、本研究課題で新たに発見した多数の史料を追加した、現時点の「完全版」である。後者「宮坂哲文関連資料目録」は、本研究課題の成果をもとに、戦中期から戦後初期に限定して作成した。

従来、宮坂哲文の父詰宗への注目度はほぼ皆無で、戦中期から宮坂父子を対比させて検討するという発想も乏しかった。主に公刊物に限られた検討ではあるが、宮坂父子が「禅」を介して結びついていた事実の確認により、宮坂哲文研究、および教科外活動研究は、新たな切り口を得たと思われる。

(2)得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究課題の成果は、次の通り公開された: 国内学会での研究発表、国内大学図書館および研究者への成果報告書送付(約80件)、国内学術雑誌等への論文掲載(うち2件は査読有)。関連して、宮坂詰宗の記事がみられる戦前の古雑誌類の収集に努めた。とりわけ、月刊誌『禅の生活』、『国民精神』、『達磨禅』、および隔月刊『星華』は、古書店を通じて比較的まとまった冊数を購入できた。いずれも国内大学等では所蔵が乏しいか皆無であり、貴重な研究資料と目される。利用後、筑波大学中央図書館に寄贈し、研究情報の充実や公開に努めた。

国内の歴史的な課題を扱った経緯もあり、得られた成果の国外への直接的なインパクトは、不足気味だった。とはいえ、現在、特別活動に代表される日本の教科外活動は、国外で注目を集めている。特別活動の理論的基盤を歴史的に検討した本研究課題の成果は、国外に対しても間接的なインパクトを持つ。

(3)今後の展望

本研究課題は公刊物の収集整理と分析に注力し、個人文書類は検討しなかった。そこで今後の展望として有望なのは、まず宮坂父子の個人史をさらに遡り、両人の旧制中学・旧制高校時代の思想形成過程を追う作業である。とくに父詰宗の関連資料は網羅されたとは言いがたく、とりわけ旧制三高時代の足跡は不明な点が多い。戦中から戦後にかけて、社会教育史において詰宗を位置づける作業も、必要であろう。

教科外活動、特別活動研究の展望としては、本研究課題で十分扱えなかった「アメリカ合衆国の extra-curricular activities の受容過程」の解明が挙げられる。戦前の中等教育機関における校友会組織の検討は進められ

つつあるが、戦後のアメリカ合衆国の関連理論や実践の受容、戦前と戦後との「接合」は、理論的にも制度的にも検討の余地がある。初等教育と中等教育との整備過程の違いを前提に、今日に至る教科外活動、特別活動の制度設計の原点を探る意義は、大きいだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

根津 朋実、『宮坂哲文の父と禅』補遺、『筑波学院大学紀要』、査読有、10、2015、133-136.

根津 朋実、『宮坂喆宗、哲文における「行」-戦中期の公刊物を手がかりに-』、『筑波大学教育学系論集』、査読無、39、2015、15-28.

根津 朋実、『宮坂哲文『禅における人間形成』(1947)前史』、『教育学研究』、査読有、第81巻第1号、2014、26-36.

[学会発表](計2件)

根津 朋実、『宮坂哲文『禅における人間形成』前史にみる教科外活動への関心』、日本特別活動学会第22回大会、2013年8月18日、鎌倉女子大学(神奈川県・鎌倉市)。

根津 朋実、『日高一二三、日高乾峰、木宮乾峰の著述に関する一考察』、日本カリキュラム学会第24回大会、2013年7月6日、上越教育大学(新潟県・上越市)。

[図書](計1件)

根津 朋実、『宮坂喆宗、宮坂哲文関連文献目録 付：木宮乾峰文献目録補遺』、平成25-27年度科学研究費補助金(基盤研究(C)、課題番号25381232)報告書、2016、全27.

6. 研究組織

(1)研究代表者

根津 朋実(NETSU, Tomomi)

筑波大学・人間系・准教授

研究者番号：50344958